

東日本大震災、福島第一原発の事故から 12 年  
原発事故は終わっていません  
私たちは今も事故を、被害を生きている

郡山地方農民連 菊地 穂奈美

2021年4月、政府は福島第一原発から発生する放射能汚染水を多核種除去設備 ALPS(アルプス)で処理し海洋放出することを決定しました。2023年の春夏に海洋放出を開始するとしています。福島県漁連はじめ県内団体が反対、大半の県民にも理解は広がっていません。「関係者の理解なしにいかなる処分も行わない」と表明していたのだから海洋放出はしない、それしかないはずです。

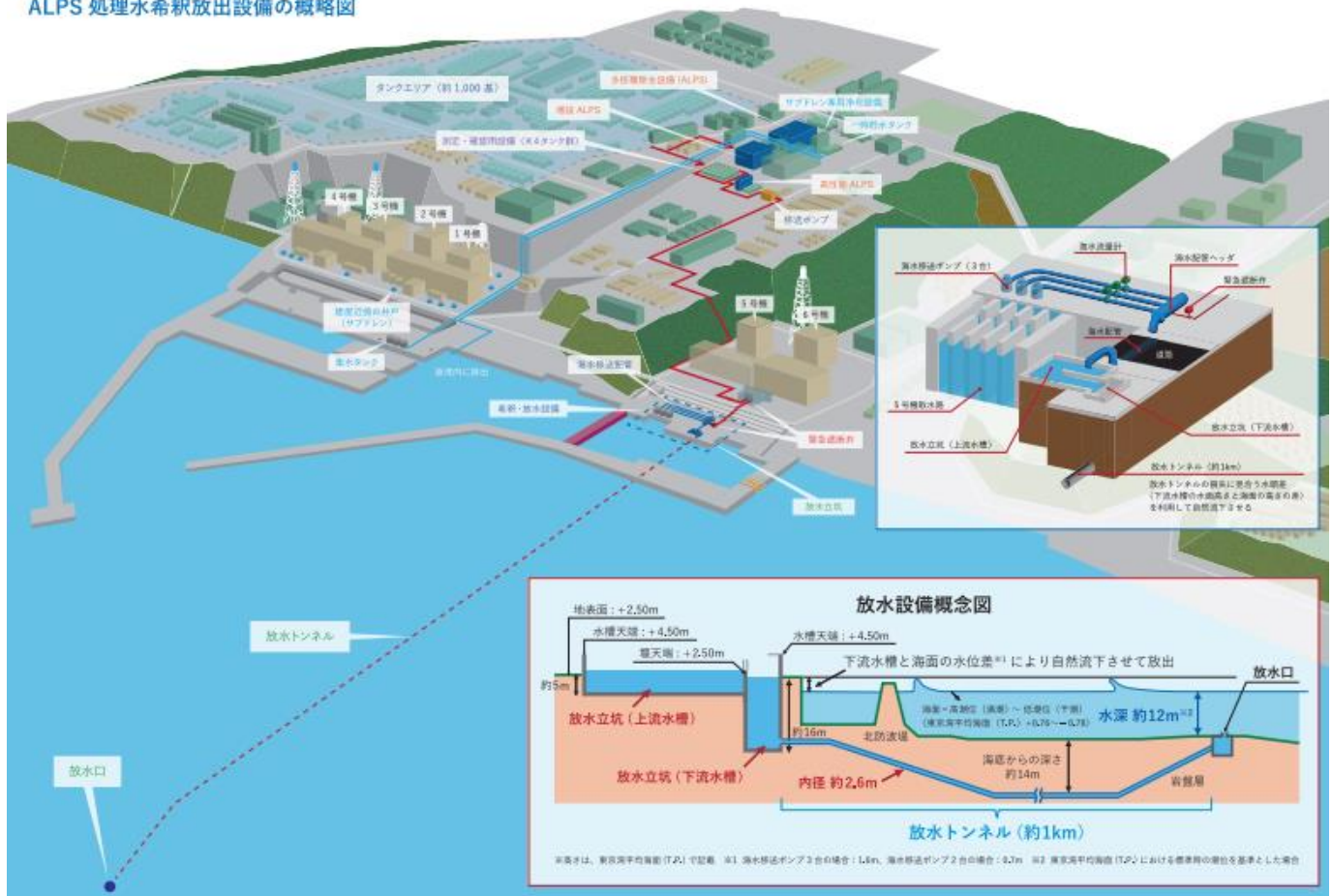
繰り返すばかり。政府も東電も海洋放出ありきですべてを進めてきたとしか思えません。

福島県農民連は、海洋放出は中止し、地質や地下水の専門家らが提唱する集水井や広域遮水壁などで汚染水を増やさない対策を講じた上で、今ある汚染水は大型タンクによる地上保管を求めています。

政府・東電との交渉、国会議員への要請も行ってきました。

しかし政府は丁寧に説明する、科学的には安全と

ALPS 処理水希釈放出設備の概略図



東京電力ホームページより

安全と安心がイコールでないことは、原発事故以降、痛感してきました。農作物から放射性物質が検出されないように試行錯誤し、測定をして、「安全です」と言っても、簡単に理解は得られない。話し合い、信頼関係を築く、福島県民にはその努力を強いたのに、政府と東電はそれをしません。風評対策を徹底し、賠償をするというけど、欲しいのは賠償じゃない。当たり前生産し当たり前前に売ること。12年間そこを目指してきた。海洋放出はその努力を踏みにじるものです。

雨水や地下水の流入で、汚染水は日々増えています。その汚染水を ALPS で処理することでトリチウム以外の放射性物質を除去できるとし、それを「処理水」と呼んでいます。しかし実際にはトリチウム以外の放射性物質も含まれることが指摘されています。政府は海水で薄めて放出するので基準値は超えなくなるという、だから安全だと。でも薄めるだけで総量としては変わらない、壊れた原発から出てくる汚染水であることは変わりません。

海洋放出は一度や二度ではない、何十年も続くのです。政府や東電が責任を持って管理する、とうそぶくが、政府や東電の言う「責任」ほど軽いものはない。

本当に海洋放出しかないのか？世界の英知を結集してこの課題に取り組むべきで、あらゆる対策をもっと真剣に真摯に検証するべきです。

政府・東電の姿勢は、説明しているのに理解しない方が悪い、反対するのがおかしい、と言っているように感じます。福島を馬鹿にしているし、国民に周辺諸国に一方的に押し付けている。

原発は、今さえよければいいという典型ではないでしょうか。今、電気代が高いから原発は必要だと簡単に言う。目先のことしか見えないのは政府もそれに同調する国民も同じかもしれない。想像力の欠如は人を貧しくすると思う。国民はそこに追い込まれているのではないのでしょうか。安価で安易な方法、安価で安易な発想、私たちは今、安価で安易な国の国民にはなりたくない。多くの人が、福島県民でさえ、汚染水の問題だけでなく原発の問題に関心になっていくことが怖い。今、私たちが行う選択は、未来への責任も負っています。未来に関心であることは、滅びの道です。

悲観はしているけど、たぶん絶望はしてない。私は考えることをやめないし想像することをやめない。だからこそ、汚染水の海洋放出に反対します。

#### 「放出ありき」のまま、なし崩し的にすすむ

政府は保管容量が満杯に近づいている、廃炉作業に支障が出るとして、2021 年 4 月に海洋放出の方針を決めました。政府と東電は漁業関係者に「関係者の理解なしには、いかなる処分も行わない」と約束したにもかかわらず放出のための工事を着々と進めています。

汚染水の流入量は減っていますが、現在でも 1 日に約 130 トン増え続けており、大半の放射性物質を取り除くという多核種除去設備（ALPS）に通した後、タンクで保管しています。処理水の海洋放出が始まったとしても、1 日の放出量には限りがありタンクが空になるには、少なくとも 30 年ほどかかるの見込まれています。